

「おじさん、どうしたの？　なんでこんなところにいるの？」

そう尋ねられたのは、ここに来て何度目だろう。人目につかないよう、すきま風が身体に染みるようなボロい空き家を使っているのに、ここを自分の場所だと勘違いしたガキ共が、こうして中に入って来ては、僕に尋ねてくる。そして、僕はその度に、こう答えてやるのだ。「僕はまだ二十二だ。おじさんと呼ぶのはやめなさい。不愉快だ」

そう言われた時のガキの反応は様々だ。が、しかし、結論は概ね二つに分かれる。黙ってこの場を去る。

興味を持って更に話しかける。

後者の方が少ないのは、教育の賜だろう。「怪しい人についてはいけません」ってやつ。まあ、僕は彼らを連れて行こうとはしていない。しかし、幼い子供も言葉を自分なりに解釈する力を持っている方が多いようで、僕に関わりとうとする子供は少ない。

それでも、中には例外もいる。このガキもそうだった。眉間に皺を寄せ、何か考え込んだかと思うと、興味津々に近づいて来やがった。

「ねえおじさん。なんでおじさんは大事そうに鞆を抱えているの？　その大きな鞆は何？　めんどくさい。なんで僕がこんな質問に答えなくてはいけないんだ。」

そう思い、僕は鞆（というより、黒い大きめのリュックサックだ）を両腕で抱えたまま、目の前の男の子から視線をそらせた。

無視無視。こういうガキは無視に限る。

「ねえねえ。何なのそれ」

ガキは僕の腕に巻き付くようにして、全身の力を使って僕の注意を引こうとする。

「ねえ、ねえ、ねえ」

「……おい、流石に痛いぞ」

完全にガキの力の使い方だ。加減つてものがわかっていない。「所詮子供のすることだから」とか、教育に無責任な大人ほど言うけれど、制御無しの力を振るってくる子供なんていうのは、まさに暴力そのものだ。

こいつもまだ、力の加減もわかっていないガキだった。年齢は七歳くらいだろうか？　もう小学校には通っていそうだが……まだまだ幼さがぶんぶんに臭ってやがる。

「おじさん。それなあに？」

しつこい。

なおも僕の抱えるリュックサックに興味を示すガキに、ちよつと苛々する。仕方がない。適当にあしらうか。

「……これはな、お兄さんの宝ものなの。誰も触っちゃいけないの」

「えー。見るのもだめ？」

「ダメ、絶対」

薬物じゃあないけど。

「なんだ。けちななあ。ちよつとくらいいいじゃん」

僕の答えに、ガキはあからさまに不満そうな表情を作る。

あー。ミスった。もつと興味なくす答えにしておくんだった。

仕方がない。作戦変更。

「……あのな。お前だって自分の大切な物を勝手に見られたり、いじられたりしたら嫌だろ？」

「うーん。僕だったら自慢したいかも」

ぐつとガッツポーズをするガキ。

「馬鹿っ！ そんなことして盗まれたらどうするんだよ。盗まれなくても、壊されるかもしれないぞ」

「そんな悪い人いるかなあ」

「いるいる。うようよいる。世間は悪意に満ちてるんだよ。だから気をつけろ、もし壊されたりなんかしたら、絶対嫌な思いする。死ぬほど嫌な思いするね」

「そう？ 死ぬほど嫌なの？」

「ああ絶対。お前みたいなガキだったらショックで死んじゃうね。そのくらい大事な物が入ってるの。だから、興味本位で見ちゃいけない。わかったな？」

「……うん」

「わかったら、もうこの話題は終わりな」

これで、片付いてくれればいいんだけどなあ。このくらいの歳が相手だと、どこまで納得してくれたのか、理解してくれたのか、まるでわからない。

「じゃあ、ここに来るだけならいい？」

「……勝手にしろよ」

そう言って、僕はその場に寝転んだ。

来て欲しくない。というか、来るなと言いたい。しかし、わざわざそう言ってやるのもめんどくさい。この手のガキは、気が済むまでは来続けるだろうし、気が済めば呼んでも来なくなる。そういうもんだ。

ポロポロの空き家は寝るには隙間風が寒い。曆の上ではとうに春が来てるけど、三月とか余裕で凍死できるんじゃないかと思う。そんなすきま風が、そこかしこから流れ込み、気温は外と大差ない。きつと、持ち主も処分するのが面倒になって、この家を放置しているんだろう。裏の扉が壊れて、誰でも入り放題。窓も何枚も割れて雨水も砂埃も入り放題。そんな空き家の、腐っついていてもおかしくないような床に寝転び、僕は鞆を抱えたまま、目を瞑った。

凍死……しないよな。流石に。

そして、少し眠りに落ち、目が覚める頃には、たいてい無視されたガキは消えている。あ

のガキもやはりいなくなり、そして——今日も目的を果たせなかったことを知る。  
(おじさん、どうしたの？ なんでこんなとこにいるの？)

ふと、あのガキの言葉を思い出す。

なんで僕を見るガキ共は、そんなことを尋ねるのだろう。警察官じゃあるまいし。

「お前みたいなガキを殺すために、僕はここに居るんだよ」なんて、言うわけないだろう。



家はある。あの空き家は僕の家じゃない。

とはいえ、これを家と言っているのか、僕はよくわからない。

今住んでいるのは、ワンルームと言えるか危うい、細いただの空間だ。都内にしては破格であるのは事実だが、とても健康的で文化的な最低限度の生活ができるとは思えない。そんな細い空間。テレビもパソコンも冷暖房もなし。あの空き家を放置して、廃墟に仕立て上げた人間の心理が信じられないくらいだ。が、流石にあの廃墟に住むよりはましだった。すきま風は少なく、風雨もましに防ぐことはできる。

実家は別にある。が、新幹線で二時間はかかる。まあ、僕が移動するときは、いつも夜行バスを使うのだが。

学生時代、夢を持って上京した僕は、ここを住処とした。

そして夢を失っても、僕はまだ、ここに住んでいる。

そしてそう遠くないうちに、僕はここを出るのだろう。

家賃は安い。でも、もうそろそろ払えない。

そして、払えなくなる前に、僕はたぶん捕まる。

そうしたら、もっとましな場所で暮らせるだろう。皮肉な話だが。

やることも、できることも縁に無い。テレビもパソコンもなく、手元にあるのはせいぜい書き込みだけで売れることも出来なかった参考書の類くらいだ。しかし、不意に今日空き家で見かけたガキを思い出し、僕はやっておくべきことを思い付いた。

まあ、焦ることはない。どうせ僕の目的は、誰かを殺そうとてくらしいものだから。

あの空き家を使うようになってから、それほど時間は経っていないと思うけど、この生活に陥るまで、それなりに時間がかかった。

だけど面倒な経緯は省こう。この程度のことはありふれたことだってことも知っている。

ただ金がなく、借金してまで学校の先生を目指した僕は、その生徒と保護者に裏切られ、教育委員会にもいいように悪役に仕立て上げられ、地方の新聞を賑わせた挙げ句、自ら職を辞して、後には何も残らなかった。それだけのことだ。

ああ、そうだった。強いて言えば借金だけはたくさん残った。これもよくある話。

大人つてものがここまで守られていないものなのかと、あの数ヶ月は本当に良い勉強になった。そして、そんな事情を知ってか知らずか、現代の大人には「大人なんだから子供くらいなんともできる」と本気で思い込んでいる大人が多いようだった。自分の子供すら、満足になんとかなっていない大人が、である。まあ、教育を家庭から切り離そうとする限り、この状況は改善されることがないだろう。

とにかく、くだらないことが幾つかあって、僕のくだらない人生は、終わってしまった。だというののに、何のつもりか、この社会は僕にとどめだけは刺さなかった。それが人道だと勘違いして。

だから、僕が殺すことにした。

今の社会がどれだけ歪んでいるのか、それを社会に伝えるには、こうするしかないだろう。本気で子供と社会の関係を大人が考えるようになるためには、このくらいのことが必要なのだ。

そして、そうすれば僕のくだらない人生にも終止符を打てる。

今僕が動く目的は、そのくらいしかない。



しかし。

「おじさん。今日もお昼寝しに来たの？」

昨日のガギが、また寄ってきた。僕は無視して、背中を向ける。

「おじさん、鞆は置いといていいの？」

昨日、何を言われても触らせなかったリュックサックが僕から離れた場所に置かれているのを不審に思ったのか、ガギが僕に尋ねる。

「ああ？ いいんだよ。別に」

正直、誰にも触らせないように抱え続けるのは疲れる。

「じゃあ、今日は触ってもいいの？」

「ああ」

「中見ても大丈夫？」

「盗まなけりゃな」

僕の答えを聞いて、ガギは嬉しそうにリュックサックを物色し始めた。

大丈夫。今日は中を見られても。

昨日、帰宅後の時間を持て余した僕は、リュックサックにちよつとした細工をしておいた。元から入っていた物の中から、お菓子やゲームなんかの子供の目を引くものは普通に取り出

せるようにして、粘着テープや刃物の類いは改造して作った二重底の中にしまっておいたのだ。かなり自然な作りになっているから、そう簡単にはばれはしない。

「おじさん。これ、底の方が膨らんでるけど、なんで？」

「……………」

勘の良いガキだ。しかし、その勘の良さが死を招く。好奇心は猫をも殺す、ってやつだ。

「いいか、そこから下の物に触るんじゃないぞ。いや、簡単には取り出せないように作ってあるけど、下手に触るんじゃない」

「ねえ、ひよつとして、ここに入ってるのがおじさんの宝物？」

「そ、そうだ。」

「命がけで守りたくなるくらいなの？」

「そうだ、命懸けの宝物だ。だから絶対に触るなよ」

「……………」

触るなど言われても、ガキは生地ごしに中身を確認する。直接でなければいいと思ってるのだろうか。

「……………なにこれ？」

「そんなに気になるのか？」

「おじさんと僕の仲じゃん」

「仲良くない」

「えー。お菓子とかゲームとか持って来てくれてるじゃん。ほら」

両手で取り出し、満足げな笑みを浮かべる。

「それはお前のために入れてるんじゃない！」

「じゃあ何のため？」

う……………やっぱりのガキめんどくさい。

「いいから、僕の宝物から手を離せ。菓子はくれてやるから」

ゲームは高いから嫌だ。気安くは買い直せない。

「わかったよ。おじさん案外ケチだね」

ようやくガキはリュックサックから手を離し。僕の方へと身体を向けた。

「じゃあせめて、中身教えて」

「中身って……………」

「おじさんと僕の仲じゃん」

またそれか。

「名前も知らない仲だけだな」

「シンイチ」

「……………?」

「僕の名前だよ。苗字も知りたい？」

「どうでもいい」

「で、中身はなあに？」

「だめだ、聞き分けが悪すぎる。どんな教育受けてるんだ。」

「わかった、わかったよ。教えてやる。その中身はな」

「そうだな、この歳のカギを黙らせるには……これが一番。かな。」

「エロ本だよ、エロ本。僕の宝はエロ本だ」

シンイチは、一瞬きよんとしていたが、直後やや顔を赤らめ、パニックになっているようだった。まあ、この歳のカギなら、上手いけばこれでもう、ここに寄りつかなくなるだろう。

「変態だっ！ おじさんは変態だっ！」

「びよんびよん跳ねながら、心外なことを言う。」

「おじさんはエロ本が捨てられそうになって、命懸けで守ってたんだね」

「ち、違うっ！ 断じて違うっ！」

シンイチはリュックサックを抱え、僕の前まで運んできて囁いた。

「大丈夫。おじさん、僕、絶対にこのこと誰にも喋らないからね。男と男の約束だよ」

そういうと、たつたたつたと、ガキらしい軽い足音を立てながらシンイチは駆けだし、風のように去っていった。

ああ、もう来ないで欲しい。



そんな僕の希望はやはり叶わなかった。やはりエロ本が逆効果だったのだろうか。その後もシンイチは度々訪れた。

いや、こいつだけではない。こんなボロ屋のどこがいいのか、シンイチ以外にも訪れる子供が増えてきていた。

「この家には面白いおじさんが住んでいて、お菓子をくれる」

「この家を秘密基地にしよう」

「この家に来れば変なおじさんが遊んでくれる。だから、暇になったらこの家で遊ぼう」

人目を避け、犯行の機会を窺っていたはずなのに、気付けば一日に一度は、こんな風にご供が寄ってきて、誰かが話しかけてくる。

やむなく僕は、道具を詰めたリュックを廃屋に隠し、公園へと逃れた。廃屋の正面、道路を挟んで向かいにある公園のベンチ。元はと言えば、ここで犯行の機会を窺っていたのだが、明らかにいい年した僕が公園のベンチに一人で座りっぱなしと言うのも目立ってしまう。大

学生に見えなくてもいいけれど、毎日公園のベンチで座っている学生がいたら、それはそれで不審者だろう。そして今の世の中、ちよつとでも不審な大人の男に、非常に冷たいものがある。

だから、僕は公園を見張ることができて目立たない廃屋に籠もり、機会を探ることにしていたのだ、それが、何故か公園で多くの人を見ていた時期より、何故か話しかけられることが増えている。

やれやれ。先生やってた頃より、ずっと子供にもてやんの。

まあ、先生やってた頃の相手は、もっと年上だったけど。

溜息が出る。真つ昼間からビールでも飲みたい気分だが、そんな金もない。

というか、風に直に晒されてけっこう寒い。冷たいビールは今の時期向きじゃないな。

空を仰ぎ見ると、弱々しい太陽の光がさしている。夏はあの狭く冷房のない家で僕を苦しめた太陽が、今はあまりにも力を失い、全く役に立たないように思える。

「いや、そんなことはない」

不意に声をかけられた、光が陰る。

「太陽を見て、光が差してる割りに全然温かくないと思っていたのだろう。その服装を見ればよく分かる。だが、いくら弱く感じられても太陽の力は偉大だ。太陽がもしもなかったら、地球はたちまち凍り付いている。その偉大な宇宙の神秘に対し、今のお前にあるのは、小市民的な「自分の体感温度」といった悩みくらいのものだろう。こんな時間帯から暇を持て余しているところを見ると、貧乏学生といったところか？」

生意気だった。超生意気な眼鏡のガキだった。そして、立っている位置が僕の座るベンチから見て段差の上になっており、僕に降り注ぐささやかな陽光を、このガキがシャツトアウトしているのも気に入らない。完全にガキの喋り方ではないが、最近よく見るガキと同年くらいに見える。

「俺か？ 俺はマルカム効果の研究のために歩き続け、気付けばこんな辺鄙な地へ足を運んでしまったのだが……」

「なんだ、そのなんとか効果って？」

「……お前、映画は観ても原作小説とかは読まないタイプだな？ あるいは、観た映画の細部までは覚えていないタイプ」

「まあ……」

そっちの方が多数派だと思っけどな。

「ふっ、まあいい。小市民のお前でもわかるように解説してやる。カオス理論くらいは知っているだろう。非線形のシステムを語る上で欠かかすことの出来ないそれだ。予測不可能な要素を包含した複雑なシステムを語る際に多用される理論なわけだが、その複雑なシステムに包含されている、言うならば瑕疵とでも言うべき異物が、システム全体に急激な変化を与

える事があり……」

「もう少し短くまとめてくれ。わかりやすく」

「どうか、自分で言っていることをわかって喋っているのかお前は。」

「……例を示してやろう」

小市民用解説を遮られ、なんとも不服そうに顔をしかめながらガキが指差したのは……僕が潜伏していた空き家だった。

なに？ なんなのこのガキ。僕のこと知ってるの？

「現代の高度にシステム化された社会において、明らかな異物だろう。人工物でありながら、人のコントロールから外れている。ああいうものがあると、そこが犯罪の温床となり、システムに対する逆が加速する。自治体も空き家対策に困っているそうだな。放火の被害で隣家が巻き込まれるとか」

「へ……へー、そりゃあ、なんともぶつそうなのはなしだなー」

いや、僕は放火犯じゃないし。焼かれたら困るのはこっちだし。

「ふん。まあそういうことだ。異物がシステムの変調を加速させ、気付かぬ時には修復不能となる。それがマルカム効果だ。それでは……ドロン！」

「なっ！」

ガキは、突然現れたと思ったら、それ以上に突然、閃光を発し、目の前から消え去った。

ドロンって……最近はその遊びが流行ってるのか？

今度おもちや屋で探してみるか。逃走時に使えるかもしれないし。



シンイチは懲りずに廃屋に通い続け、公園にまで押しかけるようになってしまい、観念した僕は、再び廃屋の方に顔を出すようになった。

学校帰りなのだろうか、シンイチはだいたいランドセルを背負ったままここに現れ、時には他のガキを連れてくる。こいつがこなくても、何日かに一度は、全く知らないガキがふらりと現れては、好き勝手に遊んでいく始末。一人暮らしのサラリーマンの家より、よっぽど使用率が高いんじゃないかというくらい、昼から夕方にかけて、賑やかな状態が続いていた。

「おじさんは何で毎日ここに來てるの？」

ある日、一人で訪れたシンイチが僕に尋ねた。

「毎日じゃねえよ。それに、僕の勝手だろ」

ふーん。となんとも興味なさそうに、シンイチは答えた。いったい何のための質問だったのやら。この歳のガキの考えることはよくわからん。

「おじさん。『にーと』ってなに？」



「……ご想像にお任せします」  
たぶん、認識間違っていないんで。

「この前ここに連れてきた僕の友達、お母さんにここに来ちゃいけないって言われたって」  
「そいつは健全な考え方だな。お前も来るなよ」

「お母さんが、変な人とききあっちゃいけませんだって」

「……僕のこと、言っちゃったのかよ」

「そういや、口止めしてなかったし。口止めしたところで、喋っちゃうだろうけど。」

「僕は言っていないよ。友達が言っちゃっただけ」

「まさかお前、リュックの奥の……」

「だいじよぶ、だいじよぶ。お宝のことも話してないよ」

僕はえつちな人じゃないから。と、言いながら、ごろんと寝転がり、シンイチは僕の持つて来ているゲームで遊ぶ。

「おい、服が汚れるだろ」

言いながら、僕は持つて来ていた新聞紙（公園で拾った。綺麗なやつだ）を床に敷いて、シンイチをその上に誘導する。自分用に持つて来たものだが、まあちよつとくらい分けてやってもかまわない。

「全く。遊んだらさっさと帰れよ」

「うん。日が沈む前に帰る」

僕の言いたいことが、わかってるのだろうか？ いや、わかってないよな。確実に。

はー、と溜息を吐き、僕もシンイチと一緒に新聞の上に寝転んだ。

なんでこうなっちゃうかなあ。

考えてみれば、今までの人生だいたいこんなもんだ。

思ったように何事もいかず、思ったように周囲は動いてくれず、気付けば思った方向の逆を向いている。

自分の努力が足りないのか、それとも周囲に対する認識が甘いのか。どちらかなんてよく分からないけど、たぶんその両方なんだろう。

学生時代、頑張って勉強しても思ったような進路には進めなかったし、部活も成果は上げられず、恋愛もたいてい片想いに終わった。

そんな苦い学生時代の後に待っていたのは、唯々苦痛なだけの社会人生活だった。身をこにするように働き、それでも生徒は何にもこたえちゃくれない。そして保護者には先生がなっていないからこんなことになるだの言われたり、そもそも最初から何のあてにもしてくれなかったりする。単に若い先生だから嘗められているのかとも思ったけど、根本的にそういう保護者はそういう保護者らしい。

しかも、労働環境の酷いこと酷いこと。この国は一体なんでそこまで教育を蔑ろにできる

んだってくらい、酷いありさまだ。毎日残業残業で、家に帰っても仕事があつて、休日、祝日も部活動のためにかり出される。というのに、残業代は「見込み」で支払われ、その額は雀の涙。学力向上やら、いじめ対策を叫ぶなら、まずは教育環境の改善をするべきだろうに、公務員の数を増やしたとか、給料を上げたとなれば、国民に叩かれるのが目に見えているからだろう、人気稼ぎ優先で、そういうところに着手しようなんて動きは希薄。むしろ特殊な先生の例を挙げ、もっと教育者の質が上げればいいと叫び出す始末。

カリスマがいればなんとかなるって、もはや政治家としては仕事の放棄じゃん！

なんて、若造が一人で言ったところで、誰も相手しないわけで、そもそも、僕はもう教育現場から逃げ出しちゃったわけだから、余計に相手されないわな。

今の僕に出来ることは……そうだな、せいぜいここに来ていいるガキ共の遊び相手になってやることくらいで……。

ん？

なんで、僕がガキ共の相手をしなきゃいけないんだ？

(おじさんは何で毎日ここに来てるの？)

シンイチの言葉を思い出す。

なんでここについて、それは……お前みたいなガキを殺すため……だろ。

思い出した。それが本来の目的だった。はずだ。

しかし、まあ。今すぐ殺す必要は無い。か。

今の生活も、なんだか少し気に入ったし。

もう少し。もう少しだけなら、今の生活を続けてもいい。

そんなささやかな願いくらい、思った方向の逆は向かないでくれる。そう思っていた。



シンイチと出会った最後の日は、穏やかに晴れた日だった。

たまには外でとシンイチにせがまれ、公園の方でガキの相手をしてやった僕だが、ガキのパワーは運動不足の身には堪える。小一時間も一緒に遊んでやったら、適当な理由を付けて、ベンチに座り込んだ。

穏やかに晴れているとは言え、三月だ。正直いって、けっこう寒い。走り回って、汗を吸った服が冷えて、必要以上に体温を奪う。

そんな僕の冷えた身体に、どこからともなく暖かな音が、聞こえてきたのだ。

パキパキと。

これは……何かの燃える音？ どこかで落ちまでも集めて燃やしてるのだろうか？

まさか、あのガキ共、僕に内緒で焼き芋でもやってるんじゃないだろうな。やれやれ、公

園の中でそんなことしたら怒られるぞ。

なんて、全く危機感が欠けた僕は、ベンチから立ち上がると、音のする方へ、公園を移動してみたのだった。

燃えていた。空き家が。

どこから現れたのか、大人が空き家を遠巻きにして騒ぎ立てている。消防車はまだ来ていないようだった。

まあいいさ。僕には関係ない事だ。

厄介ごとには巻き込まれたくない。だから僕は、そこから背を向けた。これで、あのガキ共と僕の接点もお終いだ。僕は場所を変え、また機会を窺うさ。

そう思っただけが動く、が、同時に袖を引かれ、僕は振り向くこととなった。

「シンイチくんを助けて」

身体を震わせ、目に涙を浮かべた子供が、僕の目の前に数人集まっていた。

「何言ってるんだ？ 今日みんな外で遊んでただろ。あいつだって……」

「宝物を守りに行くって」

「……はあ？」

守りに行くって……ゲームに菓子に……ナイフに粘着テープを？

っていうか、あいつにとつて宝っていったら……エロ本のことだろ。

「……馬鹿が」

僕の知ったことじゃあ……ない。

むしろ、当初の目的を達成したようなものだ。そう、目的を……。

……目的？

「ねえ、シンイチくんを助けてよ」

「……………」

僕の目的って、そーいやなんだったっけなあ。

楽に生きることだったかもしれないし、先生になることだったかもしれない。

でも、先生は楽しやないし、先生って思ってたより地味で苦痛で面倒で、全然楽しくない。

でも、なんだろうなあ。目的って。人生の目的って、何を表す言葉だろうなあ。

良く思い出せないような、そもそも、よく考えたことなかったような気もする。

でも、なんだろう。あの馬鹿なガキが死んだら、それもあんまり楽しくないだろうなあ。

「おじさん！ お願いだよお……」

おいおい、ガキ共。泣くなって。僕も泣きたくなってくるだろうが。

忘れていたのか、考えていなかったのか、よくわからないけど、たぶんなんか、あったんだろうなあ。僕にも生きる目的が。

でも、色々な期待とか、常識とか、見栄とか、そういうものに囚われて、気付いたら、そ

ういういもので着飾って、それで大人になってたような、そんな気がするよ。

ああ、寒い。何でだろう。妙に寒い。この水滴は？

どうせ捨ててたような命なんだから、誰かを殺すために使っても、助けるために使ってもかまわない。よな。

「どけえっ！ 邪魔だどいてろっ！」

気付けば僕は、全身に水を被って、叫ぶ不審者になっていた。

空き家の玄関へ突進、蹴破る。思えば、人目を気にして、ここから入ったことはなかったんだっけ。そんな僕が人目を一身に集めながら、正面突破を試みるなんて皮肉なものだ。

玄関に踏み込めば、後は楽だ……と、思っていたのが甘かった。思った以上に火のまわりが早い。それとも僕が気付いたのが遅かっただろうか。炎はすでに全体に燃え広がり、柱が何本も倒れてきている。いつ倒壊してもおかしくない。

「シンイチっ！ シンイチっ！ いるかあっ！」

叫んでみるが、声が聞こえない。これは、かなり危ないかもしれない。

燃え広がる炎をかくぐり、床を踏み抜かぬように注意を払い、倒れた家財道具や柱を避け、それでも全速力で僕は突き進む。

廊下を抜け、いつも僕らが過ごしたその部屋に、果たしてシンイチはいた。

鞆を抱え、方足を引きずるようにして、外を目指している。

「おい、今助けるからな」

足を怪我したのだろうか。動きずらそうにしているシンイチが焦れたく、僕は彼から鞆をひったくると床に放り出し、シンイチを抱え上げた。

「おじさん。鞆が……」

「馬鹿っ！ 命を懸けて守るもんじゃねえよ」

「でも、おじさん言ってたじゃん。宝物が壊れたら、死ぬほど嫌な思いするって」

「……………」

「僕みたいなガキだったら、ショックで死んじゃうって」

「ああ。まあな」

そんな言葉を、鵜呑みにするな。って言いたい。

でもたぶん、死ぬほど嫌な思いをしただろう。だから僕は言い返さなかった。

大切な宝を守るためなら、命だって惜しくない。少なくとも僕にはそう思えたのだから。



「映画研究部の設立について発表させていただきます」

職員会議でやることかあ？ とも思わないでもないが、まあ生徒が頑張っているんだ、聞

いてやらないこともない。

「メンバーの紹介です……、一年C組の飯田執子さん……続いて……」  
あれから。

僕は結局、誰も殺さないですんだ。幸い、内心に留まる限り、何を考えてもいいのがこの国の憲法らしく、未だに誰からも罰せられることもない。

まあ、振り返ってみれば若気の至りだ。あるいは、気が動転していたのだろう。どうせ僕には子供を殺すことなんて出来なかったのだ。その気があったと言うのなら、空き家に一人で入り込んできた子供を、何で襲わなかったんだと、我ながら思う。

僕はその子供を、もう名前もよく覚えていないが、あの子供を助け、その一方で助けられた。

あの窮屈極まりない自室から、未練がましくとっておいた参考書を引っ張り出し、図書館に籠もって猛勉強を開始した。幸か不幸か、図書館でもけっこう子供達にもてたりして、御陰で先生としての実技的な能力も、僕はそこで養う機会を得た。

流石に簡単に就職は決まらなかったけど、努力もコネも総動員して、偶然この私立のマンモス校に拾われて、今はなんとか糊口を凌いでいる。

「……それでは、映画研究部設立の承認を致します」

そうそう。そういえば。あの頃出会った子供達が成長していれば、今丁度高校一年くらいじゃないだろうか？

そう、例えばあの男子生徒なんか……いや、まさかな。